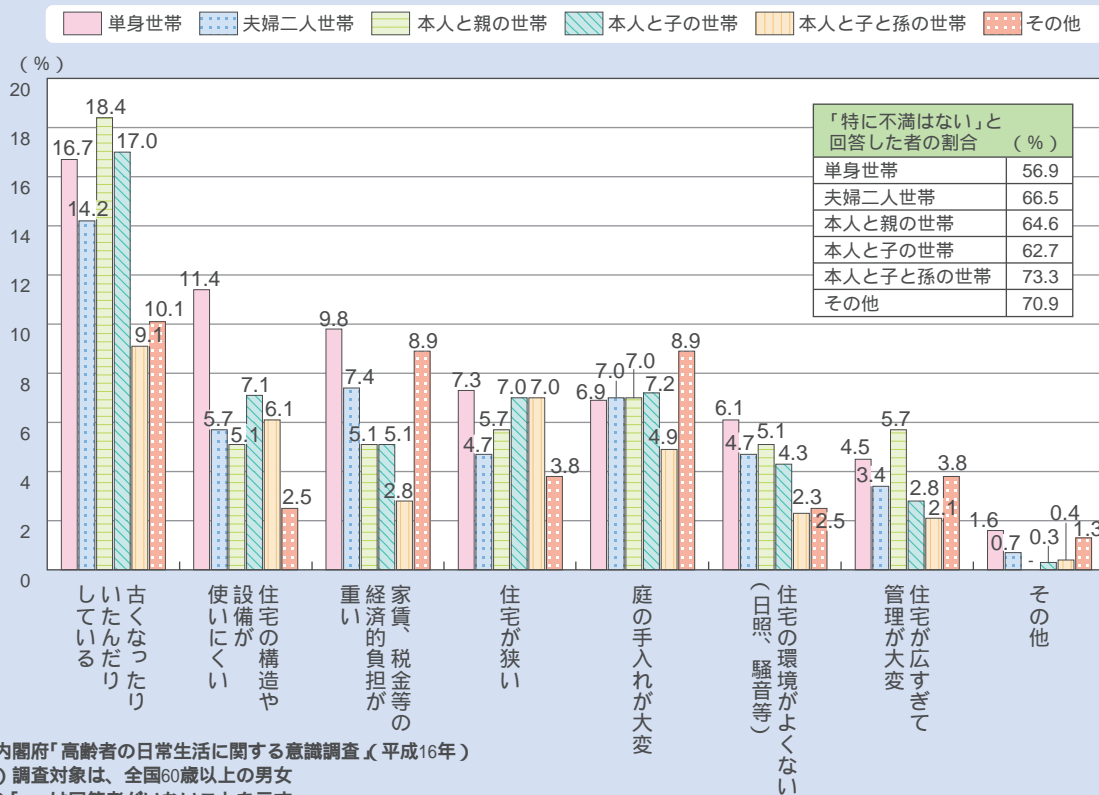


な項目をみると、「住宅が古くなったり痛んだりしている」が16.7%、「住宅の構造や設備が使い

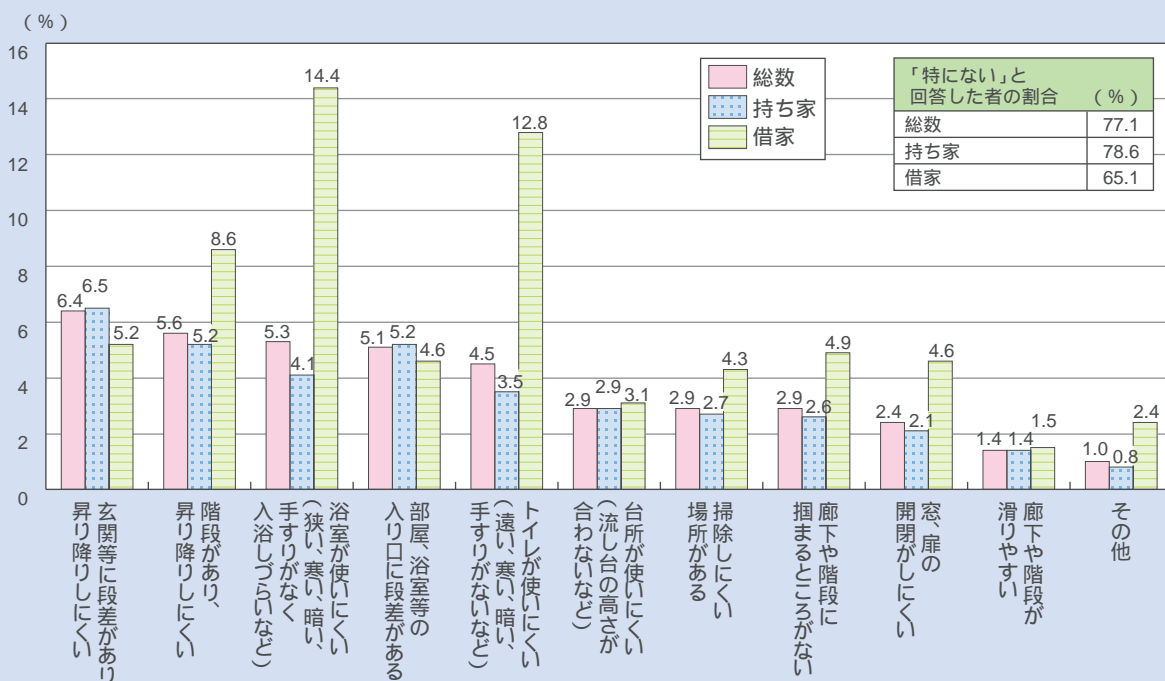
にくい」が11.4%、「家賃、税金、住宅維持費等の経済的負担が重い」が9.8%などとなっております。

図1-2-59 住宅について不満な点（複数回答）



資料：内閣府「高齢者の日常生活に関する意識調査」(平成16年)
 (注1) 調査対象は、全国60歳以上の男女
 (注2) 「-」は回答者がいないことを示す。

図1-2-60 住宅の構造・設備での支障（複数回答）



資料：内閣府「高齢者の日常生活に関する意識調査」(平成16年)
 (注) 調査対象は、全国60歳以上の男女

これらの多くは他の同居形態に比べて高い割合となっている（図1-2-59）。

現在住んでいる住宅の構造や設備に支障が「特にない」と答えた高齢者の割合は全体の77.1%であるが、住居形態別にみると借家に住んでいる高齢者では65.1%と低くなっている。

借家に住んでいる高齢者が支障があるとしている具体的な項目をみると、「浴室が使いにくい（狭い、寒い、暗い、手すりがなく入浴しづらいなど）」が14.4%、「トイレが使いにくい（遠い、寒い、暗い、手すりがないなど）」12.8%、「階段があり、昇り降りしにくい」が8.6%などの順となっている（図1-2-60）。

高齢者が虚弱化したときに望む居住形態についてみると、「現在の住宅にそのまま住みたい」が36.3%となっており、「現在の住宅を改造して住みやすくする」が21.4%、「介護専門の公的な施設に入居する」が11.6%となっている。

年齢階級別にみると、75歳以上の後期高齢者は、「現在の住宅にそのまま住みたい」とする割合が高く、年齢が低くなるほど「現在の住宅を改造して住みやすくする」の割合が高くなっている。また、「介護専門の公的な施設に入居する」の割合も年齢の低い階級で比較的高くなっている（図1-2-61）。

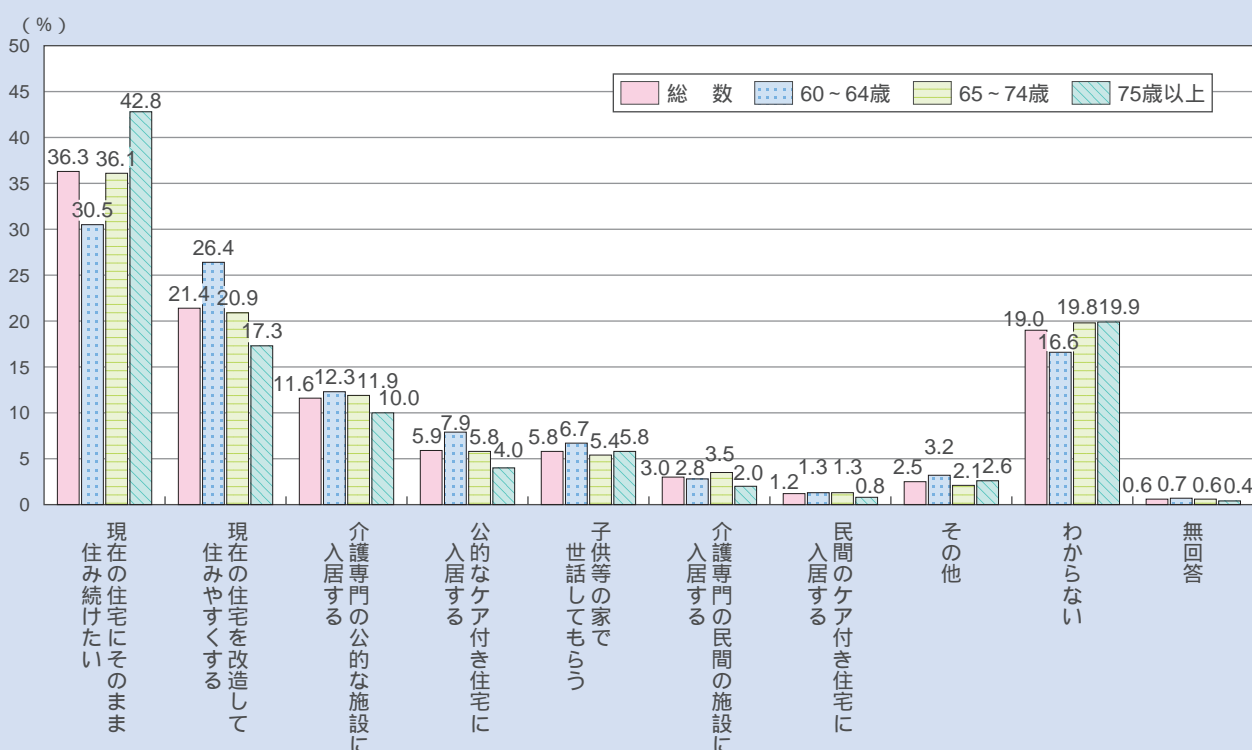
（3）高齢者の生活環境

ア 高齢者の外出

高齢者の外出状況についてみると、「自分から積極的に外出する方である」が60.2%を占め、「家族や他人から誘われたり、仲間がいれば外出する方である」が21.8%となっている。

年齢階級別にみると、75歳以上の後期高齢者は「自分から積極的に外出する方である」の割合が50.8%と、65歳～74歳の前期高齢者と比べ低く、「外出することはほとんどない」は13.2%

図1-2-61 虚弱化したときに望む居住形態（複数回答）



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査（平成13年）」

（注）調査対象は、全国60歳以上の男女

で高くなっている（図1-2-62）。

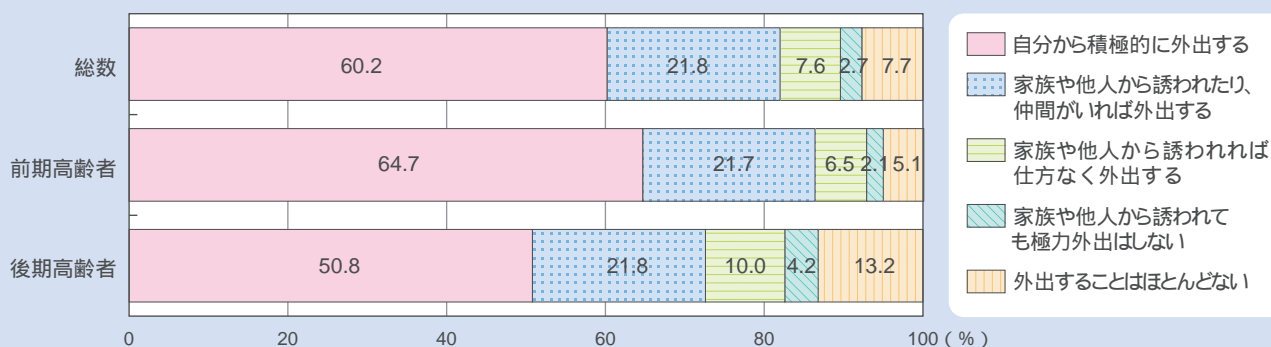
イ 高齢者の自動車の運転頻度

自分で自動車を運転する高齢者の運転頻度についてみると、「ほとんど毎日運転する」が64.8%と過半数を占め、「週2、3回は運転する」

が25.0%となっており、約9割の者が週2、3回以上運転している。

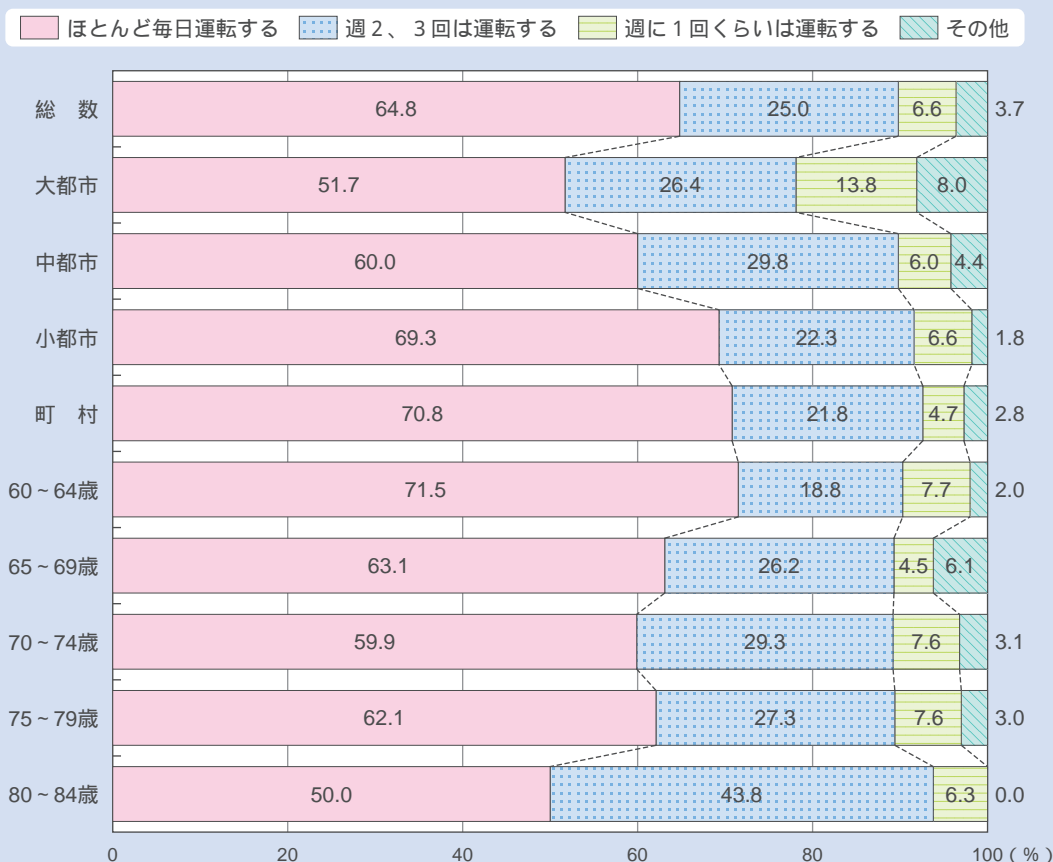
年齢階級別でみると年齢が低い層ほど、また、都市規模別では都市規模が小さくなるほど、「ほとんど毎日運転する」割合が高くなっている

図1-2-62 高齢者の外出状況



資料：内閣府「高齢者の日常生活に関する意識調査」(平成16年)より作成
 (注) 65歳以上に限定した集計結果

図1-2-63 自分で自動車を運転する高齢者の運転頻度



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(平成13年)
 (注1) 調査対象は、全国の60歳以上の男女
 (注2) 大都市とは東京都区部と指定都市、中都市とは人口10万以上の市(大都市を除く。)、小都市とは人口10万未満の市
 (注3) その他は、「月に数回しか運転しない」、「年に数回しか運転しない」及び「無回答」の計

(図1-2-63)

ウ 高齢者の転倒事故

高齢者の転倒事故についてみると、自宅内で「この1年間に転んだことがある」は12.4%となっている。男女別にみると、男性8.2%、女性16.0%で、女性は男性の約2倍の割合となっている。

自宅で転倒した者のけがの状況を見ると、「けがはなかった」は、男性50.6%に対し、女性は23.8%で、男性は転倒した者の2人に1人が、女性は4人に3人がけがをしている。

また、外出時の屋外における転倒事故についてみると、「この1年間に転んだことがある」は11.4%となっており、これを男女別にみると、男性8.6%、女性13.7%となっている(表1-2-

64)

エ 居住地域の不便な点

高齢者が現在住んでいる地域で不便に思ったり、気になったりすることについてみると、「医院や病院への通院に不便」が12.0%、「日常の買物に不便」が11.6%、「交通機関が高齢者には使いにくい」が9.5%、「交通事故にあいそうで心配」が8.2%、「近隣道路が整備されていない」が7.0%などとなっている(図1-2-65)。

(4) 高齢者と安全

ア 高齢者と交通安全

高齢者の交通安全に関して、65歳以上の高齢者の交通事故死者数をみると、平成16(2004)年において、3,046人、交通事故死者全体の

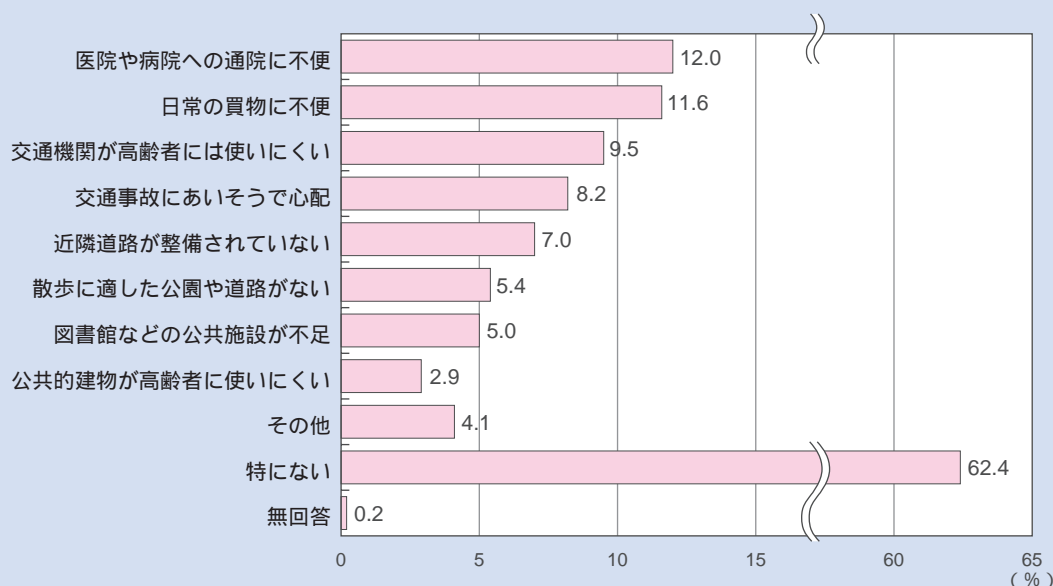
表1-2-64 高齢者の転倒事故

	自宅				屋外	
	この1年間に 転んだことはない	この1年間に 転んだことがある	この1年間に 転んだことがある		この1年間に 転んだことはない	この1年間に 転んだことがある
			けがをした	けがはなかった		
総数	87.6	12.4	(64.8)	(31.9)	88.5	11.4
男	91.8	8.2	(44.6)	(50.6)	91.3	8.6
女	84.0	16.0	(73.6)	(23.8)	86.1	13.7

資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査(平成13年)」

(注) ()内は「この1年間に転んだことがある」者を100%としたときの割合

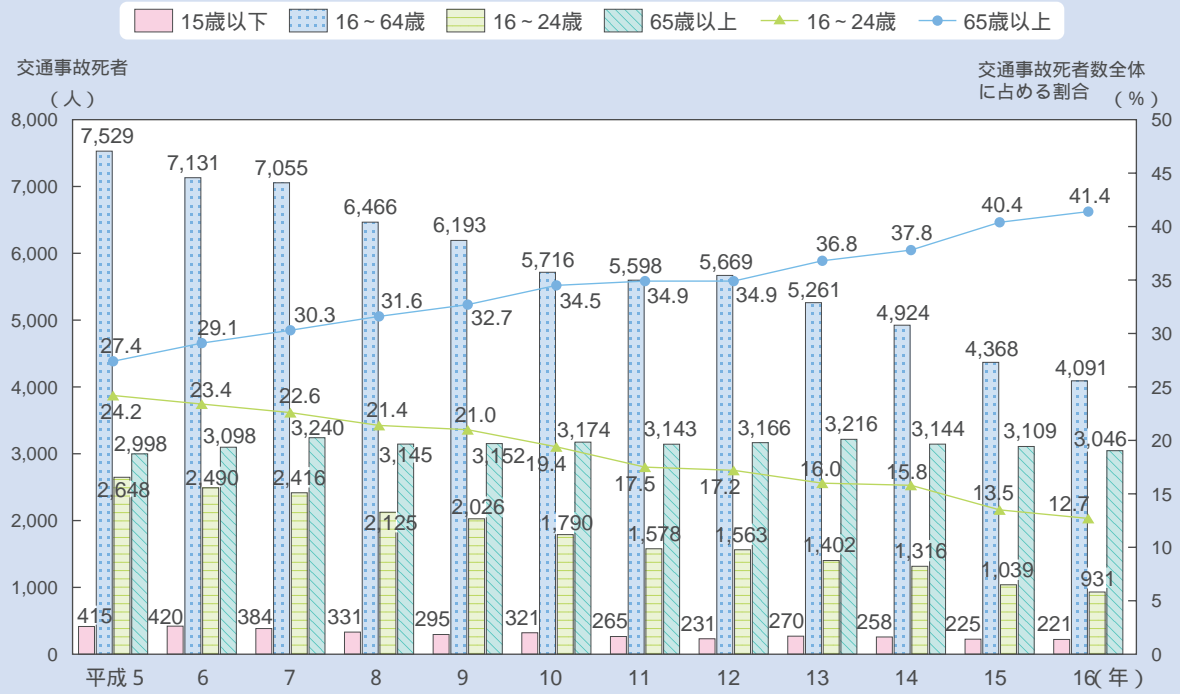
図1-2-65 居住地域の不便な点(複数回答)



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査(平成13年)」

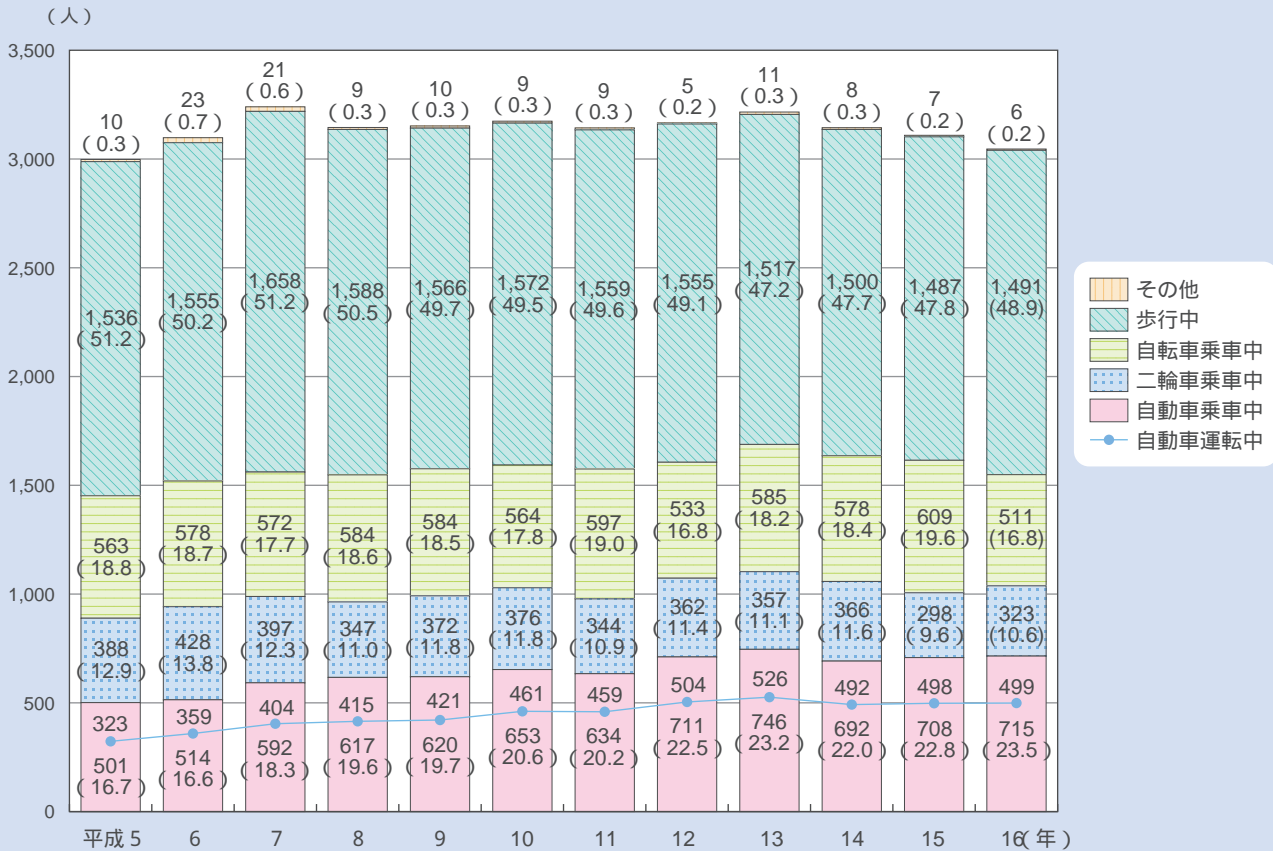
(注) 調査対象は、全国60歳以上の男女

図 1 - 2 - 66 年齢層別交通事故死者数の推移



資料：警察庁「交通事故統計」

図 1 - 2 - 67 65歳以上の高齢者の状態別交通事故死者数の推移



資料：警察庁「交通事故統計」

(注) ()内の数字は、交通事故死者数全体に占める65歳以上の高齢者の割合 (%)

41.4%を占めている。

交通事故死者数は、平成4年までは16～24歳の若者が多かったが、5年に高齢者が若者の死者数を上回り、その後も高齢者の割合の増加と若者の割合の低下が続いている(図1-2-66)。

また、65歳以上の高齢者の交通事故死者の状態についてみると、「歩行中」の割合が最も高く、全体の約半分を占めている。なお、平成16(2004)年においては、「自転車乗車中」を除くすべての状態で、事故死者数が前年を上回っている(図1-2-67)。

イ 高齢者と犯罪、災害

高齢者と犯罪、災害に関し、65歳以上の高齢者の犯罪による被害の状況について、刑法犯被害認知件数でみると、平成15(2003)年は22万3,720件で、全被害認知件数の9.3%を占めている。また、「振り込め詐欺」事件のうちいわゆる

「オレオレ詐欺」事件の平成16年中の認知件数は14,459件で、65歳以上の被害者が26.5%となっている。

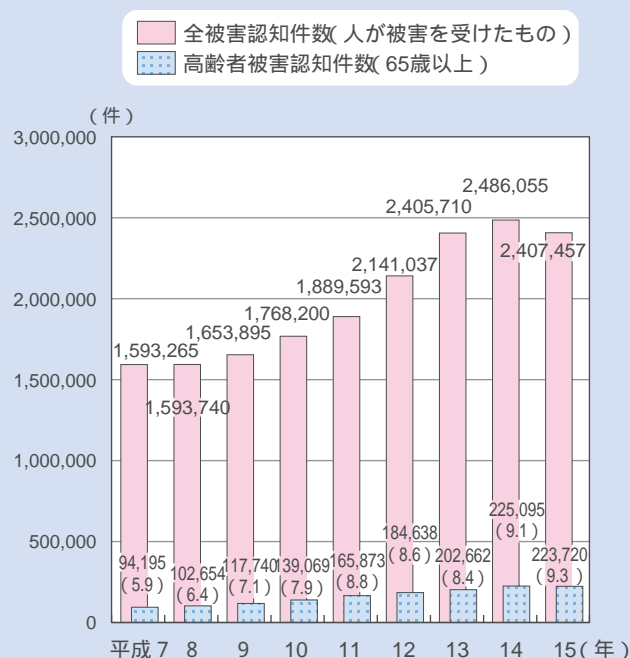
65歳以上の高齢者の火災による死者数(放火自殺者を除く。)についてみると、平成15(2003)年は744人であり、全死者数の半分以上を占めている(図1-2-68)。

ウ 家庭内における高齢者虐待

家庭内で高齢者を虐待する加害者は、「息子」が32.1%と最も多く、次いで、「息子の配偶者(嫁)」20.6%、「配偶者」20.3%(「夫」11.8%、「妻」8.5%)、「娘」16.3%となっている。

図1-2-68 犯罪、火災による高齢者の被害の推移

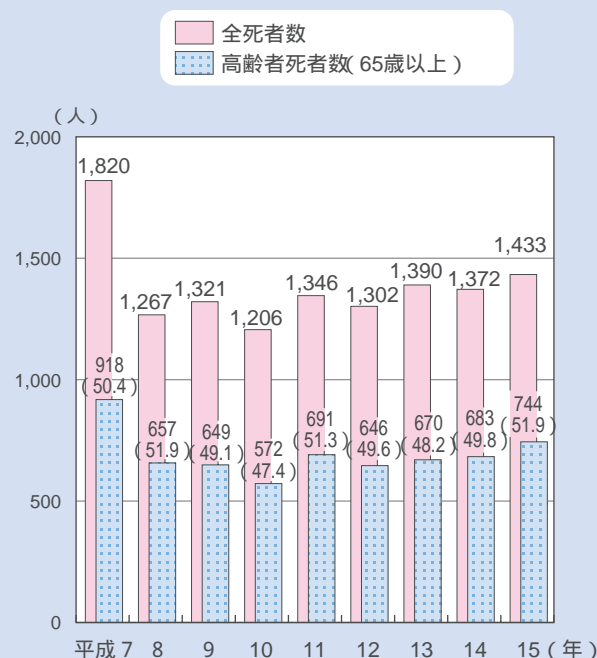
刑法犯被害認知件数



資料：警察庁「犯罪統計書」

(注) ()内の数字は、全被害認知件数(人が被害を受けたもの)に占める割合(%)

火災死者数(放火自殺者を除く)



資料：消防庁「消防白書」

(注) ()内の数字は、全火災死者数(放火自殺者を除く)に占める割合(%)